

設楽ダム連続公開講座 第1回とよがわ流域県民セミナー 講演録

<講演1：愛知大学名誉教授 藤田佳久氏>

開催日：平成24年7月28日（土）

場 所：愛知大学豊橋キャンパス「記念会館」小講堂

みなさん、こんにちは。お暑い中、たくさんの方がお集まりいただきましてありがとうございます。しかも、今日は、大村知事にご出席いただきまして大変恐縮です。私の持ち時間は30分ということでございます。しかし、その割には資料がちょっと多めでございます。ちょうどオリンピックも始まったことですし、早めにスピードをあげながら、しかし、ご理解いただけるような形でできたらと願っております。

いただきましたテーマは、東三河を知っていただくと言いますか、豊川流域を皆さんに知っていただきたいという趣旨で、私へ依頼がございました。従って、テーマは少し固いですが、「とよがわ流域の地域形成と地域像」です。地域形成というのはどのようなこの地域がまとまりを持ってきたのか、どのような地域の特徴があるのか、その核には豊川がどういうふうに関与を果たしてきたか、ということを中心にお話をさせていただきます。

豊川流域は、皆さんご存じのように、この東三河の中でも豊川の本流、寒狭川、それから宇連川ですね、この一帯であります。これが流域です。渥美半島の方は流域では、ありません。より奥の北設楽の方は、天竜川の支流域、振草、大入、二つの川が流れています。昭和40年代後半、こちらから豊川用水のための給水が行われておりまして、となりの湖西市も含め渥美半島全体に流れております。そういう点で、豊川流域の水利用地域ということに関して言いますと、かなり広い範囲に及んでおります。

これは、中部地方と言いますか、長野県が少し外れていますが、いわゆる中部圏における各市町村別の、財政力指数の合併前の1990年当時と2000年のものであります。かつて最盛期の頃は西三河がダントツでした。これが今、その10年後経った今も西三河はダントツです。ちなみに西三河の工業製品、これが日本の総貿易輸出額の55%を占めているということは、なかなか愛知県の方には理解されていないところではありますが、そのくらいの勢いをこの地域は持っています。東三河はこういうような状態。かつて、最盛期の頃は財政力指数も1.0を超える市町村が多かった。黒い所がそれを示していて10市町村以上。結構、愛知県は地方交付金の不交付団体が多かったわけです。他の県に比べましてもダントツに目立ちます。

これは、人口ですね。同じ1990年と2000年の人口増加率、10年間であります。やはりこの地域は勢いを持っております。豊橋も増えておりましたが、しかし、山間地域は減少傾向にあるということです。

少し、せつかくですので、東三河の最近の様子です。まず奥三河を知ろうという動きがあります。これは人口減少率ですね。

次に東三河の最初の動きを色々なチラシからフラッシュ的にお見せします。まずは奥三河から。これは奥三河への生物多様性セミナーとしてのツアー募集のチラシです。当日、豊根村のみどり湖までの往復のガイド役に私も入っていますが、別コースは他の方のガイドがあり、一緒に示したもので、奥の方まで出かけて行って上下流のつながりもつくろうとしたものであります。

それから、東栄町ではこういうような形、設楽町ではこういう形というように、奥三河の方ではいろんな催しが行われています。これは花祭り系、これはチェーンソーアートのイベントですね。

一方、下流の豊橋の農業というのは、農業生産額が全国的にもトップクラスです。オオバとか、施設園芸に関連したもの等、ウズラの卵生産等もあります。奥の三河の方でも、奥三河の食材を活かした食のイベントが毎年行われております。

農協が頑張っているケースです、これはひまわり農協でして、女性の方々がやっている店舗は、旧音羽町ですけど、ダントツに伸びています。これが JA あいちみなみ、渥美ですね。これも頑張っているわけです。

港の方も開発されました。元々三河港は地域の民間経済団体が提案して発展したもので、地域が世界とつながりました。しかし、まだ自動車にだけ特化しているという問題点があります。それから、豊橋の街。これは後で歴史的経過をお話をしますが、若干歴史的な遺産があります。

今の農業との関係で言いますと、専業農家率であります、豊橋から渥美半島にかけて専業農家率が全国でもトップレベル、農業所得も全国でもトップレベルです。ということは世界でもトップレベルであります。しかし、渥美の人達にはそういう認識がほとんどありません。次にお見せしますが、西三河の人が工業出荷額でダントツだということも認識がございません。そういう点では我々は我々のことをもっと知った方がいいかもしれません。これは中部地方の市町村別工業出荷額であります。トヨタの工業出荷額は10兆円。最盛期の頃です。名古屋が3兆円レベルですから、西三河がダントツであり、今や西三河工業地帯と言うのがふさわしいですね。東三河の方は約3兆円くらいです。湖西が入りますと4兆円くらいになります。この規模は、他の県に行きますとランクは高いですけど、愛知県の中ですと、西三河の比率が際立って高いのであまり比率が高くないですね。

これは、蒲郡の海岸線の風景です。最近復活しました海中渡御の三谷祭など、いろいろございます。

渥美半島も海があります。サーファーもたくさん来ております。

東三河は民俗芸能も非常に盛んです。なぜこういうものが盛んなのかということも後でお話します。これは奥三河の花祭り、これは音羽町の歌舞伎を示したものです。特に歌舞伎は東三河全域で非常に多いですね。

それともうひとつが花火です。元々、吉田藩が花火をやっていたということで、特に吉田（豊橋）の町では早くから打ち上げ花火が盛んでしたけど、こういう、いわゆる手筒花火がこの地域のひとつの大きな特徴になっております。特に大人になる男の若者は、これが通過儀礼で必要だったというものです。

そして、B級グルメ。豊橋はカレーうどんですね。ごはんとうどんの間に長芋が入っている。オオバやウズラの卵が入っている。それから、豊川では豊川稲荷のおいなりさんですね。これもいろいろな種類が工夫されています。頑張っています。

多くの展示施設もあります。8月ですので、豊川海軍工廠の空襲の悲劇です。広島と長崎の原爆投下の間の日に攻撃を受けました。これは豊橋市の市役所で行われています戦時下の状況展示です。

本日の会場の愛知大学です。今日入場していただいたこのホールのすぐ右に木造の本館がありますが、ここに展示施設があります。前身の東亜同文書院史だとか、愛知大学史だとか、ガラボウとか、いろんなものを展示しております。毎年数千人の方が見学にきていただき、先日、2日にわたった愛知大学公館の見学会には千人近くの見学者がありました。そういう催しもしております。今日、こちらが終わりましたも5時までオープンすることにしましたので、是非皆さんお寄りいただくと大変ありがたいです。また、我々が中心になって、半分くらいの東三河の各博物館とネットワークを組んでおります。こういうのもネットワークの例ですね。

もうひとつ。三遠南信、県境を越えた地域づくりですね。もうひとつの広域の連携が20年間進んでおります。私も最初の時、浜松での立ち上げの時は、コーディネーターをし、その後も関わっております。県を越えた広域ですが、これも歴史的につながりの強かった地域です。もう一回再生していこうというものです。

以上が、少しコマーシャルめいたところもありますけど、東三河の最近の動きを紹介しました。

豊川流域全体の断面図で次の図は標高1,400mくらいから0mまでの立体的な地域です。しかもそれが比較的狭い範囲の中で立体的になっている点で、濃尾平野あるいは西三河と非常に違う点です。

しかも、そのど真ん中を中央構造線が貫通しています。中部地方には静岡と糸魚川（新潟県）を結ぶフォッサマグナという、大地溝帯で大きな日本列島の蝶番として、日本の東と西を分ける断層の谷があります。その真ん中にある諏訪湖から九州阿蘇山の遙か彼方まで続く大きな断層帯があり、これが中央構造線です。これは普通の断層帯ではなくて、こちら太平洋側は堆積層、海底で堆積した地層。その反対側は花崗岩です。その二つがここでぶつかり、その境目がこの中央構造線です。従って、豊川流域は、ちょうどこの断層線の谷に沿って流れているわけで、これは自然に作られた人が利用できる道でもありました。従って、両者がぶつかった両側は花崗岩の形成も加わって、熱変成を受けまして、この両側だけはカチカチなんです。変成を受けて。同じ花崗岩でも、岡崎周辺で石屋の町ができ

るような柔らかな花崗岩にはなりません。堅いです。非常に堅いんです。古生代の層もあります。かつてここ旧鳳来寺町一带には海が入っており、そこに鳳来寺火山が噴火して、ここは火山岩となりましたが、今日では火山の根っこしか残っていません。ほんのわずかにここの周辺部に第3紀層である旧海底堆積物が残っています。瀬戸と同じような地層で、ここはお茶畑にもなっています。

全体としては堅い岩盤から構成され、降った雨は全部流れ出てしまいます。これは、後で説明します霞堤等を生み出しました。今のこの谷は自然の谷でありましたから、古墳時代にはサヌカイトですね、大和の国で取れます。二上山、天皇陵等を作ったと言われていきます。屋根板のようなサヌカイトが、ずっと豊川流域の奥にまで入り込んでいます。それから諏訪湖北方の和田峠でとれる黒曜石が南下してきている。縄文時代のことです。ここは、同時に内陸と伊勢の方とを結ぶ重要な交通路であったわけで、中央構造線の果たした役割です。

これは、この下流地域の旧石器、縄文早期、縄文中期、縄文晩期の遺跡分布を示したもので、早くから人が住み着いておりました。ただ、豊川沖積低地だけはちょっと遅れます。豊川の両側に形成された河岸段丘で崖っぷちのところが多いですね。

これは奥三河です。やはり、縄文の時期には多くの人が住んでいますね。縄文の時期というのは、今よりも気温が高く、海水準が高く、海進期であります。従って日本中には今の平野はありませんでしたので、多くの人は山に住むのが当たり前でした。この時期は七千年くらいの歴史を持っていますから、日本文化の原点は山地での生活にあります。平野での居住はずっと後のことです。それも本格的な居住は河川のコントロールができるようになってからです。弥生時代の少し前になりますと、海面が少し下がります。縄文時代の終わり頃から沖積低地が浮上してきます。その上を水田が走り、定着したりしています。

それから銅鐸の分布というのが、遠州から東三河にかけてあります。ここは、古代において一つの文化圏を作っていたということが分かります。こういうまとまりがあった空間が、とりわけ下流部における、平野部の一つの文化圏として存在していたこと、恐らくそれに関連して古くからの神社がこの豊川流域には見られます。

「先代旧事本紀」によりますと、古代の国名が出てきます。ここに尾張國、参(三)河國、穂國と順に書いてあります。新幹線を降りますと、豊橋駅に「ほの国」と平仮名で書かれた看板があります。この前、豊橋駅でこれを見た旅行者が「ほの国」とは何だろうと言っているのを聞きました。「穂」の文字に直して表現すべきかと思います。つまり、東三河にあたる穂國は、三河とは別に独立国として存在していました。これは年表です。当時のいろんな資料を復元して作成しました。穂國と参河國がありましたが、三河は境川、矢作川、豊川で三つ川があるから三河と呼ぶ説がこれまでありましたが、当時の三河とは御川とか、神川とか、美川とかの表現があり、矢作川のことだと思います。それがずっときまして、大宝律令の頃に再編成がありました。三河と穂國は合併します。細かいことは省きますが、名称は「三河」とまとめられます。合併した後、その代わりに国府(県知事)、つまり県庁

は国府、今の豊川市、名鉄線に国府（こう）という駅がありますが、県庁はそこに置かれました。その後、一本化しますと、「穂」というのが「評」という郡の名前になり、穂評というのが出てきますが、かつての穂の枠内から渥美、八名、設楽へと変わっていく所もあります。穂國の枠がベースです。この国府の辺りでは、古墳群が多くありますし、条理制の地割りがありました。

奥三河の山の中にもカイトと呼ぶ地名の村落がいくつかあります。カイトとは「垣内」と書きます。動物から身を守るあるいは防衛のために垣根の中に住んだんですね。これは、古代の集落名称です。

江戸時代に入りますと、尾張藩は一国支配となります。国というのは奈良時代に成立しますが、その後何の意味もなく、大体の範囲を示すことだけが継承されました。尾張藩及び美濃の一部で一国支配です。一方、三河では、徳川政権が誕生する時、名を遂げた人たちが群雄割拠する形で細かく領土を分け当てられた。従って、これらの領土の人たちは地域を広く知ろうとすると、狭い地域内だけしか分からない。だから民間人がたくさん三河中を歩き、多くの三河地誌を記録し、出版もした。中には、管江真澄のように三河の外へ出て、秋田まで好奇心で行ってしまい、雪の中の秋田地誌という優れた記録を残した人まで現れた。それに対して一国を支配した尾張藩は地誌をトップの方の命令で支配のために作られた。この東三河は今でもそうですが、民間主導の会議が盛んです。いろんな議論好きな人が多い。それもそのような背景があります。なお、図4の白い所は、天領、幕府の直轄領です。

中央構造線沿いに、南北交通が江戸時代に出てきます。これは庶民の道です。東海道の道は一つの宿に着く度に馬を換え、荷物を付け替え、莫大なお金がかかる官の道です。ところが、こちらは一頭の馬が最初から最後まで物資を運び、活況を呈していた。新城から吉田は水運で運んだのです。その結果、長い間、このラインがこの地域を支えてきた。中央構造線沿いを下りてきた、伊勢参りに多くの人たちが吉田（豊橋）へ来て、船で伊勢へ出かけて行った。こうして内陸の方からも、東の方からも、来る人は吉田から船に乗って伊勢に行ったのです。これが東三河を南北に縦断する文化ゾーンにもなり、経済ゾーンにもなったのです。東西方向をつなぐ東海道は確かにありますけども、それほど大きな力は持たなかった。その結果、奥三河や南信の山の方では、お伊勢さんの影響を受けた花祭りなど民俗芸能がたくさん生まれ、日本の中で最も密度が高い民俗芸能地帯になっています。そういう点では、民俗文化の研究所を是非ここに持ってきてもらいたい。奥三河の人口問題などいろんな問題が解決するのではないのでしょうか。

江戸時代の中期に、豊川、天竜川の支流を歩き回って絵を描いた人の地図や絵の作品を見ますと、ハゲ山ばかり。鳳来寺山とほんのわずかの山、矢作川流域との境界線、段戸山系に森林があるだけで、ほとんどハゲ山です。これはなぜかと申しますと、多くの村の人たちが草を刈るために山へ入り込み、草山にしてしまった。徳川政権は石高制の税制をベースにしましたから、お米の量で決まる。従って、多くの人たちは新田開発をやる。その

ために肥料が要るということで、山、平地林を肥料畑にしてしまった。これは作手村の例ですが、木はほんのわずかです。かつては、里山が豊かであったとか、森林が豊かであったというのは、現代の我々が考える勝手な幻想であります。これは、司馬江漢が鳳来町の隣の遠州熊村(旧龍山村)を描いた絵をリライトしたのですが、木がちょこっとしかない。

豊川流域はハゲ山が多く、山地の岩盤はカチカチであるという中で、鉄砲水が多発する蛇行を直せなかった。明治政府以降も、豊川だけはやらなかった。昭和40年代に放水路を整備しますが、その結果、自然そのままの川が残っていることになったのです。

これは、市役所の上から豊川を撮ったものですが、対岸には堤防がありません。水位が上がると右岸にあふれ、そこの遊水池に一旦貯留されて、また元に戻ります。こういう仕組みの箇所が九つ出来ました。

これは、中世の終わりからの豊川の洪水の頻度を示しています。黒丸が一番激しかった洪水を示します。氾濫が多かったですね。豊川の下流の沖積低地の真ん中の所に、中世の頃から多くの人々が住み始めた。肥沃ですから。吉田城の元を作った牧野古白もそう。清洲が台地上の名古屋に移ったように牛久保へ、さらに豊橋台地上へ移ります。そういう点では、この流域が交通の要所でもありましたから。

これは、幕末の時の大洪水の時の破堤箇所を図にしたものです。ブツブツに全部切れてしまっており、水害の被害の大きかったことが分かります。

これは、豊川市の豊川近くのお寺の和尚さんが100年近くのデータをとった洪水位の記録です。ほぼ2メートル以上の記録を全部とっています。6月から9月までがピーク。その高さも7メートル級以上のものが10年に1回くらい出てきます。2階建の屋根まで届くような大水害、これが頻発していました。

これは今の昭和の初期までのデータです。こちらは、奥三河の山地で降水量がどのくらいあると下流でどのくらいの水位が上がるかっていうのを私がいろいろあちこちの資料を集めながら作った図です。ほぼ、右上がり、降水量に比例して下流の洪水位がそのまま上昇するのが分かります。それだけに下流では急に襲ってくる鉄砲水を逆流させて、水を流水地で一時貯めなくては、洪水の被害から直接免れることはできなかったのです。そのために誘導する堤が築かれました。写真見にくいですが、こういう控え堤とか二番堤とか、いわゆる霞堤ですね、地元では羽衣堤と呼ぶ堤がかつてはあったわけですが、今も一部残っています。豊川沿いの一番最初の堤はこういうところですね。豊川右岸側で一番たくさん人が住んでいるところです。直撃してくる本流が一番被害をもたらしやすい所です。ここに最初に作っていったと言えます。

これがその豊川の流れ。この部分へ堤防を造りました。Tの字状に作っている。これが江戸時代の最初の村絵図から引っ張り出したものです。こういう形でどんどんどんどん広がって、豊川流域にはいわゆる不連続堤ですね、明治になってから「霞提(かすみてい)」と呼ぶ人が増えて、霞提になっちゃいましたけど。「羽衣提(はごろもてい)」とか「囲い堤(かこいづつみ)」とか、地元では言っていました。一種の輪中(わじゅう)みたいなも

んですね。

昭和以降も堤防が次々に変化します。これはさっきの市役所の13階から撮った、堤防がない牛川堤（うしかわづつみ）であります。ここから水がずっとどンドン中に入る。洪水は今の人がみると大洪水だっていふうになりますけど、これはみんな霞の中の判断で、昔と変わらないですね。

豊川はなぜこんな特徴を持っているかということです。これは河況係数、最大流量を最小流量で割った数字です。豊川は、最大流量は毎秒800トンっていうのがあります。800トン。昭和50年、60年にも記録されました。一方、天竜川とか木曾川とか矢作川は最大流量は200トンです。豊川は800トンあります。ものすごい量です。この前、九州の洪水の時、川の真ん中が膨らんで流れて行くっていう画像を見ましたけれど、豊川もかつてああいう状態になりましたね。一方、最小流量は、雨がしばらく降らないと干上がり、水が流れない。鮎が焼け死んでしまう。つまりそのくらい激しい川なんです。今、ロンドンオリンピックの隣を流れているテムズ川なんてのは、ほとんど一年中降水があり、変わりませんので、船が通ったりできる。安定してるんですね。それに比べますと、豊川は、河況係数はダントツの日本一です。それではどうにもならないってわけで、宇連ダムができて、豊川用水を作って、渥美半島の開発をしました。もうひとつ小さな大島ダムが農業用にできました。問題は今日のこの会も設楽ダムをここへ造るかどうかについて、賛成とか反対とかいろいろあるようですけども、一般的な客観的なレベルから言いますと、豊川は極めて特異な川です、日本の中で。特異な川。したがって、天竜川、矢作川、木曾川と同じレベルでは論じられないですね。降った雨がすぐ出てしまう。だから川の水を制御し、利用しようとする、やっぱりどっかで水をくい止めるっていう知恵が必要ですね。ゲリラ豪雨化傾向の強まる中、これはやっぱり工夫していく必要があるだろう。私は地理学をやっているのでも総合的な見地から、そうでない人は狭いから、というふうなことは言いませんけれども、そういうふうに見えますし、そういうことは基本的には100年ぐらいのプロセスを見据えて検討していくことが重要じゃないかなという気がします。私は毎年学生やいろいろな団体を連れて、これまで霞提一帯を訪れ、先人達の知恵の学習の場にしており、このシステムは是非歴史的な風土として保存すべきだという意見も含めてやって参りました。

次にこの東三河の中心になる豊橋はどうなのかっていうことを、東三河地域を知る上でも重要ですので、ご説明します。図を次々に流します。城下町スタート。江戸時代。生産として製糸業として。軍、あの15師団が加わります。この愛大があるところですね。消費都市にもなりました。空襲により、戦後、製糸業は全滅で、多種の、全く異業種の企業誘致をムチャクチャやった。それから、都市基盤整備が行われました。軍隊時代のことです。それが戦後の新しい都市計画で町が一変しました。旧演習地は、渥美農業に生まれ変わりました。高度経済成長期には都市化が進み、人口のドーナツ化が進むと、公共投資が行われても周辺が多かった。中心地部分に投資が行われなかったために、町の中心部に沈

下が起こった。ようやく最近見直しが進んでいます。三河港が後背地をまだ十分持っていない点でいうと、このセンターである豊橋市はどういう役割を見つけるかですね。

しかし、全体としてはバランスが非常に良く取れた人口40万都市ですね。暮らしやすく、物価も安い。食料も新鮮である。農、工、サービスが3拍子揃っている。このイメージをどうやってアピールするか。何も特徴がないというのが特徴だ、というふうにいわれてきたわけですが、こういう多色カラー、マルチカラーを生活の都としてですね、どういふふうに盛り上げていくかっていうふうなところを少し、うまく皆さんで考えていただいて、もっとアピールした方がいいんじゃないか。そのためには、工、商、農というのを互いに関係し合えること。また、工業も異業種がいっぱいです。その間の関係をどういふふうに創り出していくか、ということが豊橋と東三河での創業とか起業になるんですね。私は大学の就業斡旋というのには不満でして、どっかに勤めるばかりじゃなくて自分でも業を起こせる、そのためのトレーニングをした方がいいんじゃないかと思うんです。この地域はそういう可能性をいっぱい秘めているんですね。既存の施設や組織をネットワークしていくことです。交通網も少し工夫が要りますね。豊川インターから高速道路の交通を直接、街中へ乗りこませるっていうのも、豊橋はやるべきじゃないか。イギリスへ行きますと、高速インターからみんな各都市に高速道路が入り込んで、都市を取り巻くように整備されているんですね。そういうのをやりますと、渋滞もだいぶなくなるんじゃないか。

もうひとつ。品格、伝統とやっぱり文化ですね。で、豊橋の文化をどういふふうに作り上げていくか。幸いなことに私もおりました愛知大学文学部に15専攻ありますが、ほとんどが伝統的な学問ばかりです。歴史学、社会学、日本文学とか15もあります。そんな学問をもっと活用、交流したりする。それから、タウンセンターをどういふ風に再構築するか。情報発信の場として。それを国内外へも出していく。私がイギリスにいたときは、小さな町が世界を相手にして情報発信していくんですね。ああいう精神が地域文化、地方分権を担っているのだと思います。何も遠慮することはないですね。

一方、隣の渥美半島。これは電照菊を中心に豊川用水以降、急激な発展をして、今や世界トップレベルの施設園芸地帯です。しかし、あくまで生産に特化している。それだけじゃなくて新たな消費とか、付加価値を地元でつけた方がいい。それにはアジアのガーデニングセンターというのはどうだろう。ひとつの案です。ここで花などの消費のやり方も含め、育成、栽培技術、世界の庭づくりスクール、学校も設定したらどうだろう。そうすると、そのことが、渥美の施設園芸をもっと豊かなものにする。女性の人達もたくさん集まってくる。というようなことを考えます。そのためにはJAあいちがベースにありますけど、名称は「渥美」とやっぱりすべきだと。南にあるとか東にあるとか西にあるっていうのは訳がわからない。渥美なんですから、渥美にする。そして「世界の渥美」を目指すべきでしょう。農協合併のときにトップの人達が面子をお互いに振りかざして、こうなっちゃった。面子を捨ててやっぱり実質でやるべきだと思います。ぜひ花博は渥美半島でやっていただきたい。

これはもうひとつ地震の問題です。これは表浜で見つかった神社の中の、御厨神社の中の絵馬です。松の木に漁船が2艘、ひっかかっている。これ、安政のときの地震ですね。こういうのも発掘しつつありますね。これ重要な問題。今後の問題です。

もう、時間があとちょっとですか。東三河の山の中はどうか。わたしが20年前に批判した「星座論」というのを最後にちょっとだけやります。

これは小字（こあざ）別の集落の中がどのような条件をそれぞれ持っているかというのをそれぞれ点数化したものです。細かいことはもう時間がないので省きますね。

そうすると今までとは違う形で奥三河の集落がこんなような形で光り輝いて各星として浮かび上がってまいります。ランクがガラッと変わってきます。それをいろいろな機能別に分けて、住宅地型であるとか総合型であるとかに分けています。

これが、国道151号を含め歴史的な街道でありまして、これを「天の川」とみなします。真っ黒な森林地帯の中に、各星達が光り、それを目的別に繋げると、このような星座として輝き出します。星座は星である集落のネットワーク化です。そのためにはお互いに情報提供をし合わないといけないですね。

これがひとつのモデルとしての設楽町の場合。まあ、星座の名前はいろいろつけられる。自由にみんなで作ったらいんじゃないか。奥三河をどういうふうにするのかが、ひとつの大きな課題でありますけど、これはひとつの方法として提案したものです。最近少し繋げながら見えています。最初にご紹介した奥三河を案内するっていうのもそういう整理に沿ったものですが、そういうものが少しずつ出てまいります。そうすると地域の人達もそれをどういうふうにご利用していくか。そこで、活性化、地域の見直しですね。そして自分たちの地域への誇りを更に高めていくことが可能だと思います。ちなみに言っておきますと、奥三河地域は、天竜川水系その他に比べますと、比較的経済的には安定した空間であります。従って多くの人達が、その気になればいろんなことができると思います。

ということで、短い時間でありましたが以上で終わらせていただきます。